

(一財)語学教育研究所 2020年度講習会 講師紹介

望月 正道 (もちづき まさみち) 英語授業の「型」づくり 夏期第1回 担当

麗澤大学外国語学部で英語教職科目を担当しています。学生の模擬授業をビデオ撮影し、それを見ながら、学生が気がついたことを付箋に書きこみ、ボードに貼り、授業について議論する授業研究をしています。主な共著書：『最新英語科教育法入門』（研究社）、『英語で教える英語の授業: その進め方・考え方』（大修館書店）、高等学校検定教科書 *World Trek English Communication I・II・III*（桐原書店）、『英語語彙の指導マニュアル』（大修館書店）

小菅 敦子 (こすげ あつこ) 英語授業の「型」づくり 夏期第2回 担当

元東京学芸大学附属世田谷中学校主幹教諭。この間に多数回にわたり授業を公開、のべ約100名の教育実習生を指導、NHK ラジオ『新基礎英語1』（1994～1995年度）講師を勤める。現在は、東京女子大学他にて教職の授業、英語指導に従事。1997年「パーマー賞」受賞。語学教育研究所常務理事。パーマー賞選考委員長。第5研究グループ（授業研究）主任。

八宮 孝夫 (はちみや たかお) 英語授業の「型」づくり 夏期第3回 担当

38年間の教歴で、その大部分を男子校で過ごしました。中高6年間を通して担当した経験が2度あり、それを基に「私家版中高6年間の英語カリキュラム」を作成しました。語彙や構文は題材を通じて文脈で学び、音読を通じてアゴで覚えるのが基本、と日頃から生徒に話しています。魅力的な題材の発掘が趣味で、『くまのプーさん』やリンカンの「ゲティスバーグ演説」などが生徒には人気です（こういう分野に関心のある方も歓迎）。

淡路 佳昌 (あわじ よしまさ) 英語授業の「型」づくり 夏期第4回 担当

高等専門学校で教員生活をスタートさせて以来、インターネットやCALLを研究テーマのひとつとしていますが、現在は教科教育や授業学に重点を移しています。いったん大学を辞し、中学校で約10年勤めたあと、再び大学に戻り、現在は大東文化大学外国語学部英語学科で、静哲人先生と共に英語教員養成を担当しています。

浅野 伸子 (あさの のぶこ) 英語授業の「型」づくり 春期第1回 担当

農業高校から普通科進学校まで、いろいろな学力層の都立高校を経験してきました。その間一貫して心掛けたのは、英語を理解したい、使いたいという生徒の希望を尊重することです。流行に振り回されることなく基本に忠実に授業を作る姿勢を学んだ語研で、明日の授業に悩む先生方の力になれることをうれしく思っています。

久保野 りえ (くぼの りえ) 英語授業の「型」づくり 春期第2回 担当

東京都江戸川区立南葛西中学校での6年間、筑波大学附属中学校での26年間を通してオーラルメソッドをベースに授業を実践してきた。高等学校や大学での授業担当も経験。現在は都留文科大学・東京外国語大学などで非常勤講師として教員養成に関わる他、中学校での授業も続けている。2004年度パーマー賞受賞。2018年3月「Harold E. Palmer はリーディング力育成に関して何を残したか」をテーマに拓殖大学大学院修了。

山崎 勝 (やまざき まさる) 英語授業の型作り 春期第3回 担当

語研の研究員としてオーラル・メソッドを学んで20年以上が経ちました。埼玉県の公立高校で勤務して3校目になります。最近では、オーラル・メソッドを基礎に、段階的な指導による無理のないアクティブ・ラーニング（CLIL・協調学習）の実践を追求しています。

吉田 章人（よしだ あきと） 英語授業の型作り 春期第4回 担当

1999年より日本女子大学附属高等学校に勤務し、現在に至る。2005年より8年間、日本女子大学にて「英語科教育法」を担当。その他、「コミュニケーション英語 I・II・III」の現行版検定教科書執筆にも携わっている。

草間 浩一（くさま こういち） ア・ラ・カルト講座①・⑱ 担当

武蔵高等学校中学校で教え始めて30年以上が経ちました。途中英国ニューカッスル大学に留学、学習スタイルを活かしたCALLを研究、PhDを取得しました。その後も個々の生徒の違いを考え続け、認定カウンセラー、特別支援教育士を取得しました。『英語教育』の2019年10月増刊号、2020年5月号にUDLに関連した記事を書きました。2018年度からは早稲田大学の非常勤講師として特別支援教育の集中講座も担当しています。

根岸 雅史（ねぎし まさし） ア・ラ・カルト講座② 担当

東京外国語大学で英語教育学を教えています。近年は、言語テストに加えてCEFRなどの言語能力評価枠組みを研究しています。教員研修では、たくさんの中高の定期試験を見て、分析してきました。これまでにいろいろな検定教科書作りに携わってきましたが、現在は中学校検定教科書『New Crown』（三省堂）の著者をしています。

江原 一浩（えはら かずひろ） ア・ラ・カルト講座③ 担当

筑波学院大学で英語関連科目（常勤4年）を、東京外国語大学で「教育実習」を担当（非常勤19年）。埼玉県公立高校（普通科と工業科）13年、都内の私立女子高校4年、国立附属高校に16年勤務。英語が苦手な生徒から母語話者並みの生徒まで、また、日本人学生から留学生（主にアジア圏）までを教えてきました。オーラル・イントロダクションと板書計画を駆使し、様々なレベルの生徒に対応できる指導法を追求し続けています。

手島 良（てしま まこと） ア・ラ・カルト講座④ 担当

武蔵高等学校中学校（4校目）の教員です。関心はフォニックス、文字指導、発音指導、そして文法シラバス。いくつかの大学で「教科教育法」「教育実習」なども担当（非常勤）してきました。著書に、検定教科書『EXPRESSWAYS 1』（英語表現I。共著、開隆堂）、『これからの英語の文字指導—書きやすく読みやすく』（研究社）、『英語の発音・ルールブック』（NHK出版）などがあります。

相田 眞喜子（あいだ まきこ） ア・ラ・カルト講座⑤ 担当

小学校で、子どもたちが試行錯誤しつつ言語を獲得していくたくましい姿に感動をもらいながら、日々、汗をかきかき授業をしています。教員を目指す大学生に指導法の実践的な講義をする機会もいただき、刺激をもらっています。語研で共に研究し切磋琢磨し合う仲間がいることはとても心強いことです。小学生の子どもたちの学び方に寄り添って、中学以降の外国語学習の下支えとなる力をつける授業づくりを、皆さんとも一緒に考える機会を頂けたら幸いです。

久埜 百合（くの ゆり） ア・ラ・カルト講座⑤・⑨ 担当

教科教育法で青木常男先生に、教育実習で福井保先生と澤正雄先生にご指導いただいたのが出発点です。小学校英語反対論が盛んだった頃、成城学園（パーマーを招聘した澤柳政太郎が創立者）の初等学校で23年間、子どもたちに鍛えてもらいました。『ノッポさんの英語大すき』『えいごリアン2000～2001』の制作にかかわり視聴覚教材の大切さを学び、今はデジタル教材に凝っています。小中9年間の指導方法について、現場の先生方と考え合う毎日です。

静 哲人（しずか てつひと） ア・ラ・カルト講座⑥ 担当

15年間、中・高・高専で教えた後、大学に移って23年目。大東文化大学で英語教員養成にあたっています。主に音声技能の向上のさせ方に関心があり、一斉授業内の個別指導方法としての「グルグルメソッド」、実際に英語の歌を歌わせることでの発音練習、のふたつを提唱しています。主著は『英語授業の心・技・体』（研究社）。今年の標語は『還暦過ぎても歌グルグル!』。

松原 知子（まつばら ともこ） ア・ラ・カルト講座⑦ 担当

北陸地方の私立大学に勤めた後、東京と埼玉の大学で非常勤講師として、英語科指導法を含めた様々な英語科目を担当してきました。オンライン教材を利用した e-Learning とのブレンド型の基礎英文法科目は、担当して15年になります。語研では、第22研究グループ（談話文法研究）創設以来のメンバーとして、文のレベルを超えた文法について勉強しています。

矢田 理世（やだ まさよ） ア・ラ・カルト講座⑧ 担当

大学卒業後、私立の中高で元気な男子集団相手に奮闘する日々から教員生活が始まりました。働きながら大学院へ通い、MA TESOL を取得。今年で教歴25年です。検定教科書を軸に、学校でだからできることを最優先に据えて、生徒たちの個性を活かせる授業を目指しています。学校の仕事に加え、これまでに、大学の教職課程の授業を非常勤で5年間担当しました。「英語表現」など検定教科書の執筆もしています。

馬場 千秋（ばば ちあき） ア・ラ・カルト講座⑩ 担当

帝京科学大学教育人間科学部教授。語学教育研究所理事。英語を不得意とする学生にどのように英語を教えるかを考えつつ、小・中・高の英語教員養成に携わっています。専門は、英語ライティング指導と評価、英語授業学、英語リメディアル教育です。共著書に『英語教育学体系 §10 リーディングとライティングの理論と実践』（2010年、大修館書店）などがあります。

入江 潤（いりえ じゅん） ア・ラ・カルト講座⑪ 担当

長崎県の壱岐の島で素潜りや釣りをしていた後、縁あって上京し小学校英語教師に。24年間、小学校英語の在り方を追求すべく私立小学校の現場で日々奮闘してきました。現在は明星（みょうじょう）学園小学校の副校長という立場で「教育とは何か?」「学校とは何か?」「生きるとは何か?」を毎日問い続けています。一緒に、一度きりの人生を楽しみましょう!

千田 享（ちだ とおる） ア・ラ・カルト講座⑫ 担当

大学卒業後、公立の農業高校、工業高校、外国語学科のある高校に勤務し、現在は私服の普通高校で働いています。その間、セルハイ（Super English Language High School）の主担当として英語教育の改善に取り組みつつ、働きながら大学院へ通い MA TESOL を取得しました。教員3年目に語学教育研究所に入り、勉強をしてきました。主な共著書：高校検定教科書 *MAINSTREAM English Expression I・II*（増進堂）、『CLIL 英語で学ぶ国際問題』（三修社）

日高 由美子（ひだか ゆみこ） ア・ラ・カルト講座⑬ 担当

教員生活が30年目を迎えました。私立の中高一貫校の女子校で産休2年を含めて25年、区立の中高一貫校で2年、都立の中高一貫校で3年目になります。どの学校でも指導の根本にあるのは、授業で生徒に「リアリティーを感じさせる」ということです。教科書の題材を実際に生徒に演じさせたり、Project 活動にしたりとさまざまな工夫をして、生徒に考えさせる授業を意識しています。

小菅 和也 (こすげ かずや) ア・ラ・カルト講座⑭ 担当

千葉県立高校、東京都立高校、国立大学附属高校など、20年余り高校の現場を経験してきました。現在は、武蔵野大学教育学部で、英語教員養成に携わっています。故若林俊輔先生にお声をかけていただいたのがきっかけで、語研には20代後半から、もう40年近くお世話になっています。教師としての自分は、語研に育ててもらったと思っています。

河村 和也 (かわむら かずや) ア・ラ・カルト講座⑮ 担当

中学校・高等学校に15年勤務したあと、思うところがあり大学院に学びました。東京生まれの東京育ちですが、現在は縁あって県立広島大学で英語を担当しています。専門は英語教育史。大学時代にモンゴル語を専攻したこともあり、英語以外の言語を素材にした市民講座等も担当。主な共著書に、『外国語活動から始まる英語教育：ことばへの気づきを中心として』（あいり出版）、『英語は「教わったように教えるな」』（研究社）。

田島 久士 (たじま ひさし) ア・ラ・カルト講座⑯ 担当

大学卒業以来、一貫して公立中学校で教えています。語研で所長・理事長を勤められた故伊藤健三先生を師と仰ぐ先生に出会ったのが、英語教師になったきっかけです。そのおかげで、the Oral Methodを知ることとなりました。「学校現場でどう実践していくのか」をずっと追求して、日々の授業を考えてきました。主な共著書としては『私の授業』（大修館書店）、『英語指導技術ガイド Q&A』（開拓社）、『英語学を英語授業に活かす』（同）。

曾根 典夫 (そね のりお) ア・ラ・カルト講座⑰ 担当

茨城県立高校・中等教育学校で4校勤務したのち、2015年より、筑波大学附属高校に勤務し、現在に至ります。検定教科書を軸にした授業を展開しています。特に、授業冒頭の5分間をどのように惹きつけるか、生徒視点からの授業改善に日々取り組んでいます。2017年筑波大学にて教職実践演習を担当しました。

中山 健一 (なかやま けんいち) ア・ラ・カルト講座⑱ 担当

都内の私立中高男子校に勤めています。6年間の担任を2回行い、その間英語教育はもちろんのこと、他教科や学校全体の教育活動を視野に入れ、教育全体の視点から日々の教育実践を考えることを課題としています。勤務校の研修制度を使って、米国にてMA in TESOLを取得しました。これまで高校検定教科書の教師用資料や中学生用の英和辞典の執筆に協力しています。

粕谷 恭子 (かすや きょうこ) ア・ラ・カルト講座⑳ 担当

私立小学校で英語を教え始めたら、思いのほかおもしろくてここまで来てしまいました。大学に籍を置いて教員養成の仕事をしています。卒業した学生が仲間になってくれるのがとても楽しみです。教員研修で出会う先生方と授業づくりに関われるのも大きな楽しみです。先生方にも子どもたちにも負担の少ない授業のあり方を提案できるよう、努めています。

砂谷 恒夫 (すなたに つねお) ア・ラ・カルト講座㉑ 担当

1980年～2019年、東京都立高校6校に勤務。1989年より語学教育研究所研究員。語研大会で「単語の意味の指導」「ALTとのTeam Teaching」「Tense」「中高4校授業で実践」等のテーマで研究グループ発表をしました。特に単語の意味に興味があります。